

## カントとシユライエルマツヘル (承前)

勝 部 謙 造

## 七

シユライエルマツヘルがカントの哲學に對して加へた第二の批評は、彼が凡そ千七百八十九年より九十二年頃迄に書き續けたものと推定せらるゝ、人間の自由に就いて「といふ斷片である」。蓋しこの自由といふ問題は、この時期に於いて最も彼の興味を惹いたものである。八十九年の夏彼が其友ブリインクマンに寄せた書翰の中にこの自由問題に關して彼は既に三種の對話を書いてゐたことを述べて居る。それに依ると第一の對話に於いては、人間の意志の力をば全く他の凡ての力と同様に取扱ふべきことを證明したものであり、又第二の對話はこの理論を其實際問題に對する歸結の上より裏書きするものであり、又第三の對話は主としてカントの自由及び道德律に對する尊敬の概念を目標として書いたものであると云ふて居る。これ

等の對話と我々が今こゝに擧げて居る斷片と如何様な關係があるかといふことは、明晰には知られない。然し大體に於いて其第二の對話の一部分と第三の對話の大部分とが本篇の骨子をなして居るものと見て差支あるまい。

自由の問題に於いてシュライエルマツヘルの取つて居る態度は、先づこれを認めざる決定論の立場である。我々が曩にあげた「至善に就いて」といふ小篇に於いては、彼はカントの道德説を批評して居るのであるが、この自由論に於いては、更に一步を進めてカントの世界觀の根柢を突かうとして居るのである。元來この人間の自由といふことの深い意義は、精神現象の研究が深くなるに従つて、一層明に意識せられ來つたものである。この故にこの問題の充分なる理解は近代の哲學に於いて初めて實現せられたのである。カントはこの自由の問題が二つの側面を有することを看取して居る。即ち一方では精神世界の合法性と自由との關係である。もし精神生活に法則といふことがなければ、我々はこれを嚴密に科學的に研究することが出來ぬ。かゝる精神の合法性と自由とが如何なる關係にあるかといふことが、この問題の一つの側面である。然し他の一面に於いては、我々の心情の要求とこの自由との關係といふことがある。即ち人間精神の最高要求たる道德宗教の方面から、この

自由といふことを如何様に取扱ふかといふことである。これ我々が曩にも述べし如くに、カントが知的理論的立場たる純粹理性に於ては、二律背反として斥けし自由を、實踐理性の要請として道德の上より認めて居る所以である。即ち精神界の合法性といふ點からは、自由は決して認めらるゝことは出来ぬ。自由が認めらるゝを得るのは、只道德や宗教の要求の上からでなければならぬ。これは獨りカントのみに限らず他の誰人であつても、自由論者は結局皆この道德的要求に共通の基礎を有するものである。只カントに依りて一方の合法性の方の研究が一層進み、こゝに自由の問題は明晰に兩側面を提示することになつたのである。そこで結局此問題は道德的要求といふ方面から考察して行かねばならぬのであるが、最も大切な點は我々の道德意識の事實を其全範圍に涉りて徹底的に説明するには、意志の自由に就いて如何様なる豫想が成立すべきであらうかといふことである。シュライエルマツヘルはその自由論の出發點をばこゝに求めて居るのである。

(1) Schleiermacher:—Ueber die Freiheit des Menschen. Bruchstück (Denkmal der inner Entwicklung Schleiermachers s. 19 ff.)

(2) Jonas:—Aus Schleiermachers Leben in Briefen 4 Bd. s. 18 ff.

シュライエルマツヘルは其「人間自由論」に於いて、先づ道德律に對する責任 *Verantwortlichkeit* といふことについて論じて居る。蓋し我々の道德意識は一方に於いてこの責任といふ事柄に於いて現はれ、他方に於いては完成せられたる行爲に對する道德判斷の形に於いて示されるものである。其中でも前者即ち責任といふことが最も根本的にして而かも難解の現象である。今彼に依れば、カントの云ふ道德的責任とは果して如何なることを意味するものであらうか。これは要するに「行爲をなすと思惟せらるゝ主觀が法則に對する或特殊の關係」を云ふのに外ならぬ。如何なる關係であるかといふに、先づ第一には此關係によりて、此場合の法則が欲求能力の自然法則であることが絶對に否定せられるものでなければならぬ。第二にはこの法則は理性が意志に對する假言的自然法則であることが立言せられ、第三にはこのことからして、理性が行爲の評價に用ふる規準が、主觀の内面的價值もしくは完全性に對する唯一の標準であるといふことが云はれねばならぬ。然しながら理性は欲求能力に對して常に必然的恰にも、自然法則が物質界を支配する様に、如何なる場合にも

これを抑制壓服し得るとは限らないことを意識して居るものである。この故に  
々の實際行爲に際しては、道德律の命ずる處によりて凡て他の衝動が壓伏せられ  
が爲めには理性は時に性質の不定なる偶然的の力を欲求能力に及ぼすものであ  
ることを承認せねばならぬ。かゝる個々の場合に於ける精神能力の可能的服従の思  
想と、行爲を理性的のものと見ることより來る道德の理想的必然性の思想とが結合  
して、こゝに責任なる概念が生ずるのである。

然しながら我々は茲に一步を進めてかゝる責任なる概念が實在的のものとして  
成立せんがためには、この欲求能力なるものが如何様な性質を有するものと解すべ  
きであらうかといふことを考へて見ねばならぬ。欲求能力は意志でなければなら  
ぬ。即ち其對象は格率であり、而かもそれ自體としては善でも惡でもない意志でな  
ければならぬ。何となればこの欲求能力は道德律に従つて格率を排斥する時は、全  
く自然法則の支配下に立つものである。然し又他の一面に於いては凡ての場合に  
於いて理性の命令が實現せらるゝことが可能でなければならぬ。此故にかゝる立  
法的理性が衝動の對象となる様でなければならぬ。而してこの理性には又或る感  
情が附屬して居る。それと同時にこの感情を通して或る衝動が又これに附屬して

居る。それでこの衝動は直接に實踐的理性に關係し、欲求能力に於いてこの理性を云はゞ代表して居るものである。責任なる概念の可能性は全くこの衝動の存在といふことに依るものである。何となれば理性が欲求能力と關聯し得るのは、全くこの衝動なるものに依るからである。この衝動は以前の道德體系に於いては道德感 *moralischer Sinn* と呼ばれて居たが、最近にはカント等は「道德律に對する尊敬」 *Achtung für's moralische Gesetz* と名づけて居る。

上に述べし意志の不定性とそれから理性を代表する衝動の存在といふことが、責任の概念に依りて與へられる欲求能力の二つの重要な性質である。かゝる欲求の個々の場合に於ける作用を、我々は今や明にせねばならぬ。然るに今欲求能力の個々の活動はある時間内に於いて衝動が完全に規定せられるので、恰も自然の物理力が作用して居るかの如くに感ぜられる。かく衝動は他の凡ての對象を排拒して、ある單一なる對象に對して規定せられる。そこで我々の問題は進んで、如何にして我々の隨意的規定根據の一部が他の凡ての部分を押服し得るかといふことに成つて來る。而して其内でも先づ第一にかゝる壓服には一般に何等かの理由もしくは根據があるか否かといふことが考へられなければならぬ。この問題は只かの理由

律といふ様なものゝみから論せられることは出来ぬ。何となればこの理由律の普遍性に就ては様々な異説あるを免れぬからである。そこで今若しかゝる優逸もしくは壓服の根據がありとすれば、それは主觀の内に在るものと考へられるか、若しくは外に在るものと考へられなければならぬ。もし外部に存するものと考ふる時は全然自然力と同一になつて、道德律の命ずる處に従つてある欲求能力が他のものに對して優逸であるといふ風なことは意味を成さなくなる。そこでもし此様な優逸が存するものとすれば、それはどうしても主觀の内部に存在するのでなければならぬ。

主觀の内部に於ける欲求能力の作用は、其基礎を表象能力の状態に有するものである。して見れば様々の氣隨が比較せられて其中から或る者が優逸の地位を占め來り、終に欲求能力の充分なる行爲に移り行かんが爲めには、この優逸の基礎は現前の表象全體、及び我々の精神に於いて表象の進行によりて生ずる全精神能力の状態及び其相互關係といふ處になければならぬ。道德的責任なる概念によりて現はされる關係は、全くかゝる種類のものでなければならぬ。蓋し我々の精神の本質中に於ける衝動の働には、如何なる限界も置かれてない。この故に如何程高き程度の衝

動が考へらるゝも、尙これに對峙する一層高き衝動が認められることが出来る。この衝動の無限性といふことよりして、凡ての衝動は道德的衝動に從屬すべきものであることが容易く分る。即ち我々の要求能力の活動は、我々の表象能力の状態に基づいて居る。此故に欲求能力の活動は、我々の道德的表象の状態によりて變せられることが出来る。而してこの道德的表象の欲求活動に及ばず影響及びこの表象其者の完成に就いては、何等絶對的な限界が置かれることは出来ぬから、従つて此表象の欲求に及ばず力がこれに對立するものより一層強くなることを得ないといふ様な場合を考へることは出来ぬ。

## 九

次にシュライエルマツヘルは「人間自由論」に於て、道德判斷殊に所謂歸着 *Nurcheinung* の問題を取扱ふて居る。これが即ち前述の如く道德意識の發現の第二のものである。この歸着といふ概念と自由といふことは甚だ密接な關係がある様に考へられて居る。例へばエベラードは次の如く云ふて居る。即ち歸着とは誰人かある行為の道德性に對する創始者であるといふことを主張する判斷である。而してこの



創始者とは結局ある行爲の自由原因といふことであると。然しながら此定義は誤つて居る。行爲の道德性の創始者が自由原因であるといふのは、あまりに速斷である。これはこの歸着の問題の探究を俟ちて初めて明にせらるべきものである。我は寧ろかゝる速斷を避けて、この歸着といふことをば次の如くに解せねばならぬ。即ち歸着とは我々が或一つの行爲の道德性をば行爲に移し歸する働である。而して其結果としてこの行爲に對する判断は、行爲者の價値に對する判断の一部分をなすといふ風になるのである。かゝる歸着作用に依つて我々は屢々行動と企圖との分離を行ふものである。即ち我々は其行爲に就きて認めたる道德性の只一部分のみを行爲者に歸着するといふやうなことをする。更に又凡ての行爲は如何に些少なものであらうとも皆この歸着作用を受け得るものである。若し行爲者が此場合いさゝかの道德的動機も持たなかつたとすれば、此道德的動機の欠除といふことを行爲に歸着するのである。

今この歸着と自由とは如何なる關係があるかといふに、それはかういふことである。即ち人間行爲の原因もしくは理由は若し全く行爲者の方の及ばざる處にあるものであるとしたらば、かゝる歸着作用を行ふ道德判断は可能であらうかといふ重

大なる問題がこゝに介在して居るのである。然るに理性は或る行爲主觀が時間内に於ける一定の位置といふやうなことに關係なく、其命令の實現が普遍的に可能なるを要求して居る。即ち凡ての行爲が道德律に従ふべき要求は、如何なる場合にも必然的でなければならぬ。かゝる要求が實現せられるために最も大切なる條件は、意志と行爲との間に於ける合法的關係といふことである。此故に人間の價値に關する凡ての判斷に於いて、意志が將來の場合に於いて反對するものに對して發現せんとする抵抗方に於いて、我々は何等の隨意とか自由とかを認むることは出來ぬ。全く必然がこれを支配して居る。「我々は云はゞこの親切なる必然性に到る處へ附き纏はれて居る。どこにでも我々は其痕跡を認むることが出來るのである。」

尙又この責任及び歸着と兄弟の様な關係にあり、尙又其者に特有な雰圍氣中に我の意志が活動して居る道德的感觸の世界 *Die Welt der moralischen Empfindungen* は如何様に解釋すべきであらうか。道德的感情の生活は自由意志を豫想した場合には自己満足の自尊心と、それから強き狂熱的卑下心によつて充されて居るものである。然しながら意志と行爲との關係を必然的なものと見る時はそこに初めて、道德判斷が適度溫健を得て來て正しい道德感情が得られるものである。殊に所謂自由の感情

なるものは我々が自分の行爲の動機の一部を自覺せざるための無知より生じ來る假象である。かくの如きは却つて我々の修養改善に對して、統一ある仕事を營むことは不可能であり又不必要であるかの如くに見えしめるものである。例へば悔恨といふ様な感情に於いてかゝる迷妄が混入せらるゝ時は、悔恨の對象となれる過去の行爲と、今悔恨しつゝある現在の自我との間の連絡が絶たれてしまふから、この強き道徳的感情も結局何等の効果も齎さなくなるのである。何故に兩者の連絡が絶たれるかといふに自由論者の如くすれば、其間の關係が全く隨意的になり、何等必然の關係聯絡の認むべきものがなくなるからである。或は又現在の自分が未來に對し色々の決心をしたり努力をしたりする眞劍な成算的態度の意味も全く失はれ、意志は全く無頓着の態度に陥つてしまふことになるものである。最後にかくの如き迷妄的自由の假象は、自己活動性とか人格とか品性とかいふ人間の最高の感情を矛盾に陥らしめるものである。何となれば人間行爲の凡てを貫いて居る必然的法則性の明知のみが、これ等の感情に表はされたる深き眞義を確立し得るものであるからである。

(1) Eberhard :—Sittenlehre der Vernunft s. 6



「人間自由論」は全篇が四章に分たれ、最後は未完の儘になつて居る。然し其表はせる要旨は大體以上の如きものである。我々は勿論これを以て自由問題に對する完全なる考察であると考へることは出来ぬ。第一に彼がカントの道德律に對する責任といふ考に對して試みた批評の如きも、この概念や乃至これに關聯せる諸種の概念の分析が充分に行はれて居ない事を認めなければならぬ。従つてこゝに現はされて居るシュライエルマツヘル自身の所論が明晰を缺いて居る。殊に本篇に於いて彼はこの責任といふ事實を決定論的立場から説明しようとしたことは明であるが、彼の所論だけでは決定論によりてかゝる道德的意識の事實を充分に説明確立し得るか否か、不明である。デイルタイが指摘せる如く、意志は其現象に對して認識し得べき動機を有し、従つて自由ならざるものであつて初めて、他の凡ての動機をば道德的動機に依つて壓伏し得るものであるといふことが確立せられて、茲にこの責任といふ點より見たる自由問題が徹底的に解決せられるわけである。然るにシュ

ライエルマツヘルはこれを充分に示して居ない。

次に歸着といふ問題に就いても、意志と行爲との間に必然的關係が存して初めて、この事實が可能になり得るといふ彼の論旨は認むべきも、これを以てカントの自由論に對する致命的打撃とはなすことは出来ぬ。カントの意志の自律や人格に關する思想は、シュライエルマツヘルがこゝに取つて居る態度に依つては、其要點が見落されて居る傾がある。これ等についてのカントの思想はもつと深い意義を持つて居る。

以上の如き欠陥は脱れないのであるが、然しながら我々がこれを二十四歳の白面の一青年の手になれるものとして考ふる時は、本篇の如きは實に驚嘆に價するものである。哲學史上決定論の立場より自由問題を論じたるもの決して尠しとはせぬ。スピノーザの如き果た又ヘルバルトの如き隨分立派なものもある。然し本篇の如き其所論の形式はとも角として、思想の大體の骨格としては今日に至るまで矢張り最も徹底的決定論的自由觀と云ふて差支ない。

「至高善に就いて」に於いて既に我々が看取することの出來た鋭き批評的態度は、この「人間自由論」に至つて一段の發展を遂げて居る。蓋し本篇の特徴は人間生活の總

る方面を包括する絶大なる法則性を認むる處にある。これ實に彼が表面に於いてはカントに刃を向けつゝあるの觀あれども、其徹底的な批評精神に至つてはカント其人より傳へ來つたものに外ならぬのである。この絶大なる法則性を基礎とせる世界觀は次に轉して彼の宗教的世界觀を形成する主要力素である。後年の彼が「教理論に於けるキリスト教的的人生觀の萌芽は、既に茲に認むることが出来る。然しながら我々は彼の思想が發展して其處に至るまでには、一方にはカントの批評哲學の精神が益々強く作用して彼の思想の基調をなせると同時に、他方には又新なる要素が來りてこれに加はれるものあることを認めねばならぬ。(未完)

(1) Dilthey:—Leben Schleiermachers 2te Aufl. s.145